

●「同時代を生きて」 瀬戸内寂聴、ドナルド・キーン、鶴見俊輔（岩波書店、2100円）

●「戦争が遺したもの」 鶴見俊輔、上野千鶴子、小熊英二（新曜社、2940円）

●「昭和史の決定的瞬間」 坂野潤治（ちくま新書、735円）

●「生きかた名人」 池内紀（総合社発行・集英社発売、1785円）

## 本で人に会い 時代と人生を とらえる

### 先

日、十年ぶりに田辺聖子さんと対談をした。その少し前の取材で、

将来の計画を質問されたが、何年も先よりさしあたりの対談しか頭がない。それでも、そのころ読んでいた、寂聴さんとキーンさんと鶴見さんの「同時代を生きて」の



森 毅

MORI TSUYOSHI

こともあって、時代と人生が気になっていった。

この三人は、一九二二年の五月か六月に生まれているから、同時代ということになる。ぼくの場合だと一九二八年だが、ぼくが一月で田辺さんが三月。他にどんな人がいるだろうと、手元の人名録で「あ」のところを調べたら、該当者は数人で、知っているのは網野善彦だけで、彼が死んだ直後。あとを続ける気も失った。なんの根拠もないのだが、八十年というのがよい寸法で、その時代と人生とをまとめて考えるために、あと数年は生きたいというのが将来の計画。

この三人のことだから、焦点は文芸になる。鶴見さんには、戦後世代の上野千鶴子、小熊英二の「戦争が遺したもの」もあって、こちらは焦点が政治。ぼくの場合は、戦争ということ

### 戦

九四〇年代になる。前半が戦中で後半が戦後となるが、両方ひっくりめて戦争。青春と重なるゆえか、むしろ後半に思い入れが深い。鶴見さんだって、そのころの話が豊富である。戦争について語るのに、戦中よりむしろ戦後を語るほうが、現代という時代にとって意味が深いというのがぼくの考え。なお、ぼくが北海道で暮らしていたのは五〇年代だが、そのころはあまり時代とかかわらなかつた。時代を意識しはじめたのは、むしろ京都へ行ってからの六〇年代。鶴見さんだって、そのころの話題が多い。

争ということに関して

なら、それよりも三〇年代のほうに関心がある。そのころぼくは子どもだったから、あまり時代にかかわってないし、鶴見さんだって不良少年の時代。その時代を書いたものでは、坂野潤治の「昭和史の決定的瞬間」が面白かった。現代という時代を考えるのにも示唆的である。本にある政治でなくて文芸のほうなら、「昭和ルネッサンス」であって、政治と文芸との重なりぐあい

が面白い。こうして八十年の時代と人生を語るにしても、どこかに焦点が行

### 時

くよないだろう。経営者なんかだと、焦点は経済になるかもしれない。人生はもっといろいろなあろが、文章として残っているものがベースになるのはいたしかたない。ぼくとしては、文芸にも政治にも関心のあるほうだし、「思想の科学」を通じての鶴見さんの人脈から見るとはよい趣向だ。

代と人生とで、もっと人生のほうを考えたい。池内紀「生きかた名人」が面白い。「たのしい読書術」と副題にあるように、これだって文筆界中心だが、顔を合わせなくとも本でさまざまな人に会える。ただし、それぞれの人が生きた時代は違うから、自分の生きた時代と参照するためには、読者が時代を再構成せねばなるまい。鶴見さんのほうを補完させて、時代と人生。

人生八十年をどう生きるかと言えば、その八十年の時代と人生をどのようにとらえるかにつきるような気になっている。自分ひとりではとらえきれぬので、その時代を生きた人の人生と自分の人生を重ね合わせることにする。それには顔を合わせなくともすむのが、ぼくにとっての読書のたのしみ。

(数学者)